

## 論文

## 女子大学生における超常現象観の基本的構造 (Ⅲ)

— 超常現象観, 宗教意識, および宗教行動との関連 —

<sup>1</sup>諸井 克英 <sup>2</sup>大島 有梨沙<sup>1</sup>同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・特別任用教授<sup>2</sup>同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2019年度卒業

**The Factor Structure of Paranormal Beliefs  
in Female Undergraduates (III):  
Relationships among Paranormal Beliefs, Religious Consciousness,  
and Religious Behavior**

<sup>1</sup>MOROI Katsuhide <sup>2</sup>OSHIMA Arisa<sup>1</sup>Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor<sup>2</sup>Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2019

Keywords: paranormal belief, religious consciousness, religious behavior, covariance structure analysis.

## I. 問題

諸井・早川・板垣 (2014) は, 不思議現象あるいは超常現象の信奉をまとめて超常現象観と呼び, 76項目から成る超常現象観尺度を作成した。その上で, 回答者が抱く超常現象観と基本的性格特性や非現実感との関連を検討した。基本的性格特性の測定には, 性格の5側面 (外向性, 神経症傾向, 開放性, 誠実性, 調和性) を測定する和田 (1996) が作成した Big Five 尺度を利用した。また, 「何らかの対象が現実のものと実感されない」程度と定義される非現実感を測定するために須永 (1996) が開発した尺度を改変した。因子分析 (主因子法, プロマックス回転) によって超常現象観の5側面が抽出された (占い信奉, 未知存在信奉, 吉凶信奉, 科学信奉, 反科学信奉)。一連の重回帰分析を実施し, 超常現象観が基本的性格特性や非現実感によって有意に規定されていることが見いだされた。

次の研究では (諸井・徳光・板垣, 2016), 女子大学生

を対象として超常現象観尺度の再検討と日常的思考スタイルとの関連が探索された。超常現象観尺度 (諸井ら, 2014) に加えて, 帰属複雑性尺度 (Fletcher *et al.*, 1986; 諸井, 2000), および批判的思考志向性尺度 (廣岡・小川・元吉, 2000; 廣岡・元吉・小川・斎藤, 2001) が実施された。帰属複雑性とは, 「出来事の原因を単純-複雑に捉えるかに関する個人差」である (諸井, 2000)。また, 批判的思考は, 楠見 (2011) によれば次の3側面から構成される。a) 論理的・合理的思考であり, 規準に従う思考, b) 自分の推論プロセスを意識的に吟味する内省的・熟慮的思考, c) より良い思考を行うために, 目標や文脈に応じて実行される目標志向的思考。因子分析 (主因子法, プロマックス回転) によって各尺度の下位尺度化をした上で, 超常現象観と日常的思考スタイルとの関連が重回帰分析によって検討された。興味深いことに, 予想に反して, 全体として積極的な思考が超常現象観を促進していた。

ところで, 筆者らが超常現象観に取り組んだ背景には,

次のようなわが国の状況があった。日本人を対象にした全国調査 (NHK 放送文化研究所, 2010) によると、「仏」や「神」への信仰はどの時代も高いが、他方で「あの世」, 「奇跡」や、「お守り・おふだの力」に対する信仰も「オウム真理教」事件の影響もあり'90年代にいったん低下するものの2000年代になると再び増加している (西山, 1991)。このような状況に基づき、様々な実証的研究が行われるようになった (岩永・坂田, 1998など)。これが筆者らによる超常観現象への取り組みのきっかけであった。

2018年に実施された全国調査によれば (小林, 2019), 日本人では信仰している宗教がないと答えた者が6割近くを占めた (なし62%, 仏教31%, 神道3%, キリスト教1%)。また、信仰心があるとした者は26% (ないとした者22%) であり、信仰心をもつ者は減少していた (1998年調査32%)。大まかにまとめると、わが国では、特定宗教の信仰者は、元々多いわけではないが一般的には減少傾向にあるといえよう。日本人の特徴とされる自然信仰もやや減少気味である (「自然に宿る神」: 今回74% (98年78%))。井上 (1999) は、わが国の社会状況の変容と関連させて「宗教ブーム」を探ったが、「戦後は、日本人はゆるやかではあるが、宗教離れを示している」という結論は今なお妥当といえよう。興味深いことに、わが国には元々が特定宗教に由来する行事が日常行事として溢れている (年始の神社参拝, 聖バレンタインデー, お盆の里帰り, クリスマスなど)。さらにいえば、子どもの教育や人生の節目での儀式を見ると、井上 (1999) が指摘するようにキリスト教信者の如く決定される (ミッションスクール, 教会での結婚式)。謂わば宗教がブランド化しているのだ。

ところで、わが国における宗教に関する実証的研究は、心理学あるいは社会心理学分野ではあまり取り組まれていなかった。古くは、安藤 (1962; 1965など) がキリスト教信者を中心にキリスト教信者の心情や行動傾向を測定することを試みた。また、金児 (1997参照) は、浄土真宗門徒を対象として社会的態度と行動の観点から計量的研究を系統的に実施した。宗教現象があまり積極的に心理学や社会心理学の俎上に置かれることがなかった原因として、金児が指摘するように、「科学たろうと努力した心理学にとって、宗教は避けるべき対象であった」ことも大きな原因として考えられる。しかし、わが国の場合、宗教に対する二律背反的態度が存在し (一方ではブランド化, 他方では宗教絡みの事件に由来する「アブナイ」「アヤシイ」といった否定的感情の醸成; 井上, 1999参照), 中立的価値に基づく宗教の取り扱いが困難であったことも重要であろう。しか

しながら、わが国においても、実証的な宗教心理学の確立を意図して概論書も公刊され (金児 (監修), 2011: 松島・川島・西脇 (編), 2016), 実証的研究の積み重ねへと状況が変化している。

本研究では、これまでに著者らが取り組んで来た超常現象観に宗教的意識や行動傾向を連結することを試みる。これが本研究の主目的である。

宗教学者の岸本 (1961) は、「人間の生活活動を中心として、宗教を捉えようとする」観点から宗教を次のように定義した。「宗教とは、人間生活の究極的な意味をあきらかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつと、人々によって信じられているいとなみを中心とした文化現象である」。その際、「宗教とは、そのいとなみとの関連において、神観念や神聖性を伴う場合が多い」と付帯条件をつけた。その上で、個人を軸において宗教を位置づけた (図1)。岸本自身は宗教学の確立を意図したのであるが、このように、当該個人を軸としたことがわが国の実証的研究を促す契機ともなった。

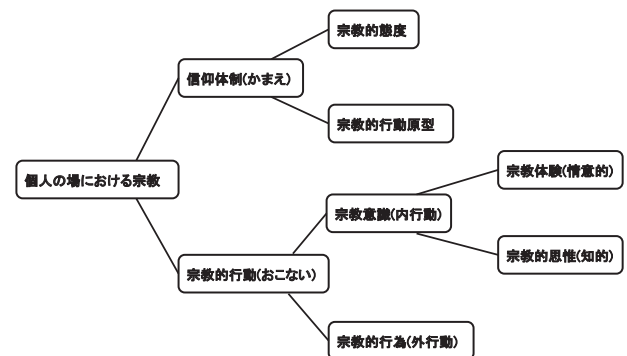


図1 個人における宗教の構図 (岸本, 1961より)

性格に関する心理学的研究に先駆的功績を残した Allport (1950) も、日常生活における宗教性の重要性を指摘した。人の成熟の進展を a) 広がりゆく興味の通路 (広がりゆく自我), b) 分離と洞察の通路 (自己客観視), c) 統合の通路 (自己統一) とした。いち早く宗教を心理学の対象とした Allport は、人格的成熟と信仰を重ね合わせたのである (信仰の発展段階: a) 素朴な軽信, b) 様々な懐疑, c) 生産的思考)。

わが国においても、最近、松島 (2016) が、宗教性を「宗教にまつわる事柄について、知り (知識), 信じ (信念), 感じ・体験し (体験), 行い (行動), それらの影響を受ける (効果)」と定義し、宗教性に関わる実証的研究を提唱している。さらに、わが国の人々が「特定の宗教教団を含

め宗教にまつわる事柄」を「継続的に信じること」に囚われすぎていると指摘し、宗教性概念の狭隘化から解放の必要性を指摘している。

以上に述べたことを踏まえて、本研究では、新たに宗教意識（宗教に対して日常的に抱いている態度）や宗教行動（宗教に関して日常的に営んでいる行動）の測定を導入し、超常現象観との関連を解明する（図2）。これを本研究の主目的とする。

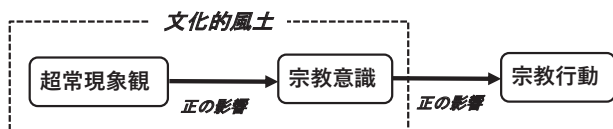


図2 超常現象観，宗教意識，および宗教行動に関する仮説

まず、宗教意識と宗教行動との関連については、社会心理学における伝統的テーマである態度と行動との関連についての考えに基づき（原岡，1970参照），次の仮説を設けた。

**仮説1:** 宗教に対して肯定的意識を抱いているほど，宗教に関して積極的行動を営むであろう。

先述したように，わが国では大まかに特定の宗教に対する信仰が衰退している一方で，超常現象的態度を抱きやすい文化環境が存在していると推測できる。つまり，宗教性と超常現象観との重なりがあり，それが様々な人生上の出来事を契機として特定宗教への入り口へと導かれやすいのかもしれない。そこで次の仮説2を検討する。

**仮説2:** 超常現象観は宗教に対する肯定的意識を促進するだろう。

これら2つの仮説を検討するために，先行研究（諸井ら，2014；2016）に引き続き女子大学生を対象として質問紙調査を実施した。

## II. 方法

### 質問紙調査の実施と対象

京都府内に位置する女子大学（建学の精神として「キリスト主義」が掲げられている。1年次全員に「聖書 A・B」が必修科目として設定されているが，学内・外で実施される様々なキリスト教行事への参加は自由である）における社会心理学の講義を利用して，質問紙調査を実施した（2019年9月30・10月3日）。回答に際しては匿名性を保証し，実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。さらに，回答の有無や内容が成績とは無関連であることも強調された。

青年期の範囲を逸脱している者（25歳以上）を除き，以下の尺度に完全回答した女子学生297名を分析対象とした（1回生56名，2回生109名，3回生123名，4回生9名）。回答者の平均年齢は19.84歳（ $SD=0.91$ ，18～23歳）であった。

### 質問紙の構成

質問紙は，回答者の基本属性に加え，a) 超常現象観尺度，b) 宗教意識尺度，および c) 宗教行動尺度から構成されている。

#### 1. 超常現象観尺度

超常現象観を測定するために，諸井・早川・板垣（2014）による尺度を利用した。諸井らは，先行研究で用いられた項目を整理し76項目から成る尺度を作成した。女子大学生を対象に実施し，因子分析（主因子法，プロマックス回転（ $k=3$ ））によって，5因子が抽出された（占い信奉，未知存在信奉，吉凶信奉，科学信奉，反科学信奉）。諸井・徳光・板垣（2016）は，諸井ら（2014）で明確な負荷を示した51項目を用いて，女子大学生に実施した。同一の方法で因子分析を試みたところ，前研究と一致した因子（占い信奉，未知存在信奉，吉凶信奉）と新たに出現した因子（霊的存在信奉，超能力信奉）があった。本研究では，元々の76項目版を用いた。

#### 2. 宗教意識尺度

回答者が日常的に抱いている宗教に対する態度を次のようにして測定した。松島（2005）は，既存の宗教性に関する測定尺度を整理・検討し，宗教意識を態度の3成分のうちの認知的成分（信念，知識）と感情的成分（体験，共同体）から構成されると，これら2成分から社会・世俗的な効果（報酬，責任）を付加した。既存尺度を収集し，検討を加え33項目の測定項目に到達した。ただし，この研究では特定宗教の信仰者（ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャン）の宗教意識の測定を目指しているため，ホーリネス系教会牧師のチェックを経ている。

松島は，この尺度をホーリネス系教会に通う日本人に実施し，因子分析（主因子法，プロクラテス回転）により5因子を抽出した（信念，体験，共同体，効果報酬，効果責任）。およそ半数の回答者を対象に1ヵ月後に尺度を再度実施し，高い再検査信頼性（ $r=.833\sim.937$ ）を得た。さらに，ホーリネス系教会の受洗者と特定の宗教を信仰していない者を比較し，宗教意識5側面すべてで基準関連妥当性が確認された。

本研究は，特定の信仰者における宗教意識の解明を狙いとした松島（2005）の研究とは異なり，宗教意識の一般的測定を企図している。そこで，彼が最終的に得た5因子29

項目の文章を一般的な宗教意識を表すように改変した(表1-b, 付表1-a 参照)。

### 3. 宗教行動尺度

回答者が宗教に関して日常的に営んでいる行動を測定するために、安藤(1965)が作成した宗教的行為インベントリーを利用した。安藤は、「外的行動としての宗教的行為(宗教行為)」を測定するために、22項目から成る宗教的行為インベントリーを作成した。メソジスト系の私立女子高校3年生を対象に尺度を実施し、因子分析(完全セントロイド法)により、3因子を抽出した(神中心的生活, 宗教的修養因子, 世俗生活への積極性・責任性)。さらに、同じ高校の2年生で尺度全体での再検査信頼性を確認した(8ヵ月間隔,  $r=.75$ )。本研究では、安藤が作成した項目を特定の宗教に限定されないように一般的表現に修正した(表1-c, 付表1-b)。

### 4. 回答方法

各尺度ともに、「ここ6ヵ月」を基準として日常の様子を回顧させ、4点尺度で評定させた(「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。なお、評定順の効果を相殺するために、各尺度で評定用紙をそれぞれ頁単位でランダムに並び替えた(超常現象観尺度8頁, 宗教意識尺度3頁, 宗教行動尺度2頁)。

## Ⅲ. 結果

### 各尺度の検討

#### 1. 分析の手続き

各尺度について以下の手順で因子分析(最尤法, プロマックス回転( $k=3$ ))を行った。まず項目水準の検討を行った。尺度項目ごとに、平均値の偏り( $1.5 < m < 3.5$ )と標準偏差値( $SD > .60$ )のチェックを行い、不適切な項目を除去した。次に、残りの項目を対象に尺度ごとに因子分析(最尤法, プロマックス回転( $k=3$ ))を試み、初期共通推定値を確認した。この値が低い項目( $< .25$ )を除去した。

そのうえで、初期因子固有値 $\geq 1.00$ を満たす解をすべて求め、プロマックス回転後の負荷量の絶対値 $.40$ を基準に解釈可能な因子解を同定した。その際、a) 特定因子の負荷量が十分に大きく(絶対値 $\geq .40$ )、b) 他因子への負荷が小さい(絶対値 $< .40$ )という基準に一致しない項目を除き再度分析を行い、明確な負荷量パターンが得られるまで、このことを反復した。最終的に、因子負荷量に基づき下位尺度項目を選別し、信頼性チェックを行った上で構成項目平均値を下位尺度得点とした。

#### 2. 超常現象観尺度

項目水準により、3項目が不適切であった( $m \div 1.5$ :  $\text{paran\_e\_10}$ ;  $m < 1.5$ :  $\text{paran\_g\_5}$ ,  $\text{paran\_g\_9}$ ;  $SD < .60$ :  $\text{paran\_g\_9}$ )。残りの項目を対象に因子分析を行い、初期共通性推定値が適切であることを確認した( $> .29$ )。2～18因子解が算出可能であったが、明確な8因子解を採用した(表1-a)。

3つの因子は、諸井ら(2014)で見いだされた因子とほぼ同じであると判断できるので、それぞれ「I. 占い信奉」、「II. 未知存在信奉」、「VIII. 反科学信奉」とした。また、諸井らの「占い信奉」項目が性格や神道の側面が分離したので、それぞれ「III. 性格占い信奉」、「IV. 神道の信仰」と命名した。さらに、「吉凶信奉」が3つに細分化されたので、それぞれ「V. 超能力信奉」、「VI. 霊魂信仰」、「VII. 北枕信仰」と名づけた。

#### 3. 宗教意識尺度

項目水準でのチェックの結果、8項目が不適切であった( $m \div 1.5$ :  $\text{rel\_con\_a\_1}$ ,  $\text{rel\_con\_a\_3}$ ,  $\text{rel\_con\_a\_8}$ ,  $\text{rel\_con\_c\_9}$ ;  $m < 1.5$ :  $\text{rel\_con\_a\_4}$ ,  $\text{rel\_con\_a\_5}$ ,  $\text{rel\_con\_b\_9}$ ,  $\text{rel\_con\_c\_7}$ ;  $SD < .60$ :  $\text{rel\_con\_a\_5}$ )。これらの項目を削除して因子分析を行い、初期共通性推定値を確認した( $> .45$ )。2因子解のみが算出可能であったが、解釈可能な明確な因子パターンが得られた(表1-b)。第II因子で負荷が高い項目は、松島(2005)の研究での「信念」に該当していたので、「II. 信仰上の体験」と命名した。第I因子のほうは、松島が得た他の4因子項目が混在していたが、信仰により得られる様々なものを表す項目から構成されているので、「I. 信仰による効能」とした。

#### 4. 宗教行動尺度

項目水準でのチェックは、8項目が不適切であることを示した( $m \div 1.5$ :  $\text{rel\_beh\_a\_1}$ ,  $\text{rel\_beh\_a\_2}$ ,  $\text{rel\_beh\_b\_2}$ ,  $\text{rel\_beh\_b\_3}$ ;  $\text{rel\_beh\_b\_8}$ ;  $m < 1.5$ :  $\text{rel\_beh\_a\_4}$ ,  $\text{rel\_beh\_a\_5}$ ,  $\text{rel\_beh\_a\_8}$ ;  $SD < .60$ :  $\text{rel\_beh\_a\_5}$ )。これらの項目を除いた因子分析での初期共通性推定値も適切であった( $< .20$ )。2因子解で明確な因子パターンが認められた(表1-c)。第I因子は、安藤(1965)の「神中心的生活」項目で負荷が高いため「I. 信仰中心的生活」とした。第II因子では、安藤の研究で得られた2つの因子に含まれる項目から構成されたが、項目の意味を考え、「II. 社会への貢献」と名づけた。

#### 5. 下位尺度得点の検討

以上の分析で得られた下位尺度得点の分布について正規性の検定を行った(表1-d)。すべての得点で、正規性分

表1-a 超常現象観尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転〈k=3〉）の結果—回転後の因子負荷量—

当該因子負荷量		当該因子負荷量								
【Ⅰ. 占い信奉】		【Ⅳ. 神道的信仰】								
paran_a_7	友だちと占いの話をよくする。 占 .81	paran_e_8	お守りには力がある。 × .81							
paran_a_8	占いに夢中になっている人がいると、話したくなる。 占 .81	paran_c_5	お守りをもつと安心できる。 占 .75							
paran_g_4	占いの本をよく読む。 占 .73	paran_g_3	神社にお参りすれば願いが叶う。 × .58							
paran_c_9	占いをしてもらうことがよくある。 × .69	paran_d_7	お守りをもつと実際に願いが叶う。 占 .48							
paran_b_1	自分が関心のある占いがある。 占 .67	paran_h_2	縁起のよくない言葉がある。 × .42							
paran_e_7	友だちとおまじない（神秘的なものの威力を借りて、災いを除いたり起こしたりする術）の話をする。 占 .59	【Ⅴ. 超能力信奉】								
paran_a_5	占いは、自分の生活にとって必要である。 占 .55	paran_a_6	念力（精神をこめた力）で物体を動かすことができる人がいる。 未 .82							
paran_b_2	おまじない（神秘的なものの威力を借りて、災いを除いたり起こしたりする術）をすることがある。 占 .53	paran_g_1	物体を精神の力で浮揚させることのできる人がいる。 × .65							
paran_h_1	雑誌の占いの欄を読む。 占 .52	paran_b_10	念力（精神をこめた力）でスプーンを曲げることができる人がいる。 未 .62							
paran_a_3	迷っているときには占いは必要である。 占 .52	paran_c_7	超能力（普通では、できないことを実行してみせることのできる力）をもっている人がいる。 未 .52							
paran_f_7	だれかがおまじない（神秘的なものの威力を借りて、災いを除いたり起こしたりする術）を教えてくださいと試してみる。 占 .47	【Ⅵ. 霊魂信仰】								
paran_g_8	新聞の「今日（あるいは一週間）の運勢、星占い」欄を読む。 占 .47	paran_g_7	死者の霊は存在する。 未 .95							
【Ⅱ. 未知存在信奉】		paran_d_8	死んだ人の霊魂（肉体のほかに別に精神的実体として存在すると考えられるもの）は存在する。 未 .62							
paran_f_8	異星人（地球以外の星に住む、人に似た生物）が地球に来ている。 未 .76	paran_a_9	前世や来世は存在する。 未 .46							
paran_e_5	政府は宇宙人に対する事実を隠している。 未 .64	【Ⅶ. 北枕信仰】								
paran_f_3	未知の怪物（ネス湖のネッシーなど）は存在する。 未 .64	paran_c_8	北枕（枕を北にして寝ること）は、縁起が悪い。 吉 .90							
paran_c_2	古代文明には宇宙人が関係している。 未 .64	paran_e_4	北枕（枕を北にして寝ること）にして寝るとよくない。 吉 .88							
paran_e_9	UFO（未確認飛行物体）は存在する。 未 .63	【Ⅷ. 反科学信奉】								
paran_f_5	ムー大陸（太平洋にそんざい存在したとされる上空上の大陸）は存在した。 未 .62	paran_c_10	人類は、科学の進歩とひきかえに多くのものを失った。 反 .61							
paran_d_4	ナスカの地上絵は宇宙人に対するメッセージである。 × .50	paran_a_4	これ以上、科学が進歩しても人類は幸福になれない。 反 .56							
【Ⅲ. 性格占い信奉】		paran_b_8	科学が人類を幸福にした面よりも不幸にした方が大きい。 反 .48							
paran_d_5	誕生星座によって性格が決まる。 占 .79									
paran_f_6	お互いの血液型によって相性の善し悪しが決まる。 × .70	【因子相関】		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ
paran_e_6	人と人との相性は星座によって決まる。 × .69	I	.31	.50	.46	.38	.30	.26	.09	
paran_a_10	血液型によって性格を知ることは可能である。 占 .68	Ⅱ		.29	.29	.45	.46	.24	.16	
		Ⅲ			.40	.39	.17	.33	.13	
		Ⅳ				.28	.35	.42	.11	
		Ⅴ					.38	.18	.17	
		Ⅵ						.25	.13	
		Ⅶ								.16

N=297

適合度検定:  $\chi^2_{(88)}=751.55, p=.001$

初期因子固有値≥1.29; 初期説明率60.21%

諸井ら（2014）との対応： 占い信奉, 未知存在信奉, 吉凶信奉, 科学信奉, 反科学信奉

布からの有意な逸脱が認められた。

次に、下位尺得点相互の平均値比較を行った。超常現象観下位尺度8得点を比較すると、「Ⅵ. 霊魂信仰」が最も高く、「Ⅴ. 超能力信奉」が最も低かった。宗教意識では「Ⅱ. 信仰上の体験」、宗教行動では「Ⅱ. 社会への貢献」がそれぞれ

れ高かった。

### 6. 超常現象観下位尺度得点に関する高次因子分析

超常現象観の8下位尺度得点を対象に高次因子分析を試みた（最尤法，プロマックス回転〈k=3〉）。初期因子固有値>1.00の基準で2因子解が得られた。しかし、「Ⅷ. 反科

表1-b 宗教意識尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果—回転後の因子負荷量—

		当該因子負荷量			当該因子負荷量
〔I. 信仰による効能〕			〔II. 信仰上の体験〕		
rel_con_b_2	人間は、宗教的な信仰があれば真の生き方ができる。	信 .81	rel_con_c_1	私は、神や仏などによって守られていると感じる。	体 .82
rel_con_a_9	私は、宗教的信仰を通して自分自身を見つめることができる。	報 .78	rel_con_c_5	私は、日常生活の重要な場面で、神や仏などが自分の近くにいると感じる。	体 .79
rel_con_b_7	人間は、どんなに科学が進歩しても、宗教的な信仰がなければ幸せになれない。	信 .71	rel_con_c_3	私は、宗教的信仰の場（教会、神社、寺など）にいます、現に神や仏などがそこにいると感じる。	体 .71
rel_con_b_10	私は、宗教的信仰によって、自分の悲しみをやわらげることができる。	報 .70	rel_con_a_2	私は、神や仏などの下に自分がいるという感覚がある。	体 .65
rel_con_a_6	人間は、宗教的な信仰があれば希望を見出すことができる。	信 .65	rel_con_b_8	私は、神や仏などからの愛を強く感じている。	体 .54
rel_con_b_6	私たちは、自分たちが信じている神や仏などのことを家族やまわりの人々に伝えるべきである。	責 .61	rel_con_a_7	私の人生の中で神や仏などに関係した何かが積極的に働いているような気がする。	体 .54
rel_con_c_8	私は、同一の神や仏などを信じている人々を素晴らしい人だと思う。	共 .55	rel_con_b_3	私は、神や仏などに包み込むような温かさを感じる。	体 .46
rel_con_c_2	私は、同一の神や仏などを信じている人々と交わることによって、自分自身の生き方を省みる。	共 .51	rel_con_c_6	私たちは、宗教的信仰の場（教会、神社、寺など）に参加すべきである。	効 .44
rel_con_b_5	私は、宗教的信仰によって、感謝する気持ちを学ぶことができる。	報 .50	II		
rel_con_b_4	私にとって、宗教的な信仰の場（教会、神社、寺など）には親しみを覚える。	共 .47	〔因子相関〕 I .69		
rel_con_c_10	私たちは、宗教的信仰の場（教会、神社、寺など）で行われる催しに出席すべきである。	責 .43			
rel_con_c_4	宗教的信仰は、人生観、世界観、価値観などの基準を私に与えてくれる。	報 .43			

N=297

適合度検定： $\chi^2_{(65)}=479.40, p=.001$ 初期因子固有値 $\geq 1.30$ ; 初期説明率57.84%

松島（2005）との対応：信念、体験、共同体、効果報酬、効果責任

表1-c 宗教行動尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果—回転後の因子負荷量—

		当該因子負荷量
〔I. 信仰中心的生活〕		
rel_beh_b_6	私は、自分が何か困った時に、まず神に祈る。	神 .82
rel_beh_b_10	私は、家族の誰かにお祝い事があるときには、宗教的な感謝の気持ちを表す。	神 .61
rel_beh_a_9	私は、自分以外の人たち（例えば、家族、友人、社会、国家など）のために、祈ることがある。	神 .51
〔II. 社会への貢献〕		
rel_beh_a_3	私は、一緒に仕事（または勉強）をすることが嫌だと思われるような人とも、協力していこうと努力する。	世 .69
rel_beh_a_6	私は、学校生活や勉学に全力をつくそうと努力する。	世 .55
rel_beh_b_9	私は、世界の平和のために自分ができることを何かしようと思っている。	宗 .46
rel_beh_b_5	私は、学校の中で他の人のために自分を犠牲にすることがある。	宗 .42
II		
〔因子相関〕 I .40		

N=297

適合度検定： $\chi^2_{(6)}=10.64, p=.223$ 初期因子固有値 $\geq 1.26$ ; 初期説明率56.46%

安藤（1965）との対応：神中心的生活、宗教的修養、世俗生活への積極性と責任性

表1-d 各尺度における下位尺度得点の検討

	平均値	標準偏差	(a)	(b)	(c)
<b>〔超常現象観〕</b>					
I. 占い信奉	2.16 de	0.65	$\alpha = .89$	.46~.72	0.08, $p = .001$
II. 未知存在信奉	2.05 ef	0.64	$\alpha = .85$	.52~.71	0.08, $p = .001$
III. 性格占い信奉	2.06 ef	0.74	$\alpha = .84$	.66~.69	0.09, $p = .001$
IV. 神道的信仰	2.72 b	0.61	$\alpha = .79$	.45~.71	0.11, $p = .001$
V. 超能力信奉	<u>1.94</u> f	0.69	$\alpha = .79$	.58~.68	0.13, $p = .001$
VI. 靈魂信仰	<u>2.88</u> a	0.72	$\alpha = .78$	.54~.65	0.15, $p = .001$
VII. 北枕信仰	2.51 c	1.01	$\alpha = .91$	.83	0.18, $p = .001$
VIII. 反科学信奉	2.22 d	0.54	$\alpha = .60$	.40~.44	0.16, $p = .001$
〔反復測定分散分析〕 $F_{(5,54,1640,26)} = 100.73^*$ , $p = .001$					
<b>〔宗教意識〕</b>					
I. 信仰による効能	1.75	0.59	$\alpha = .92$	.63~.77	0.10, $p = .001$
II. 信仰上の体験	1.82	0.66	$\alpha = .90$	.64~.73	0.12, $p = .001$
〔対応のある t 検定〕 $t_{(296)} = -3.08$ , $p = .001$ $r = .80$ , $p = .001$					
<b>〔宗教行動〕</b>					
I. 信仰中心的生活	1.97	0.74	$\alpha = .70$	.50~.55	0.12, $p = .001$
II. 社会への貢献	2.49	0.57	$\alpha = .63$	.36~.47	0.13, $p = .001$
〔対応のある t 検定〕 $t_{(296)} = -12.65$ , $p = .001$ $r = .42$ , $p = .001$					

N=297

\*: Greenhouse-Geisser の検定

\*\*: 異なる英文字は有意に異なることを表す ( $p < .05$ , Bonferroni の方法)(a) : Cronbach の  $\alpha$  係数値

(b) : 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値

(c) : 分布の正規性検定: Kolmogorov-Smirnov の検定に対する Lilliefors の修正値

表1-e 超常現象観下位得点に関する高次因子分析(最尤法, プロマックス回転 ( $k=3$ )) の結果一回転後の因子負荷量一

	I	II
<b>《行動示唆》</b>		
I_ 占い信奉	.69	.05
IV_ 神道的信仰	.67	.06
III_ 性格占い信奉	.66	.02
VII_ 北枕信仰	.49	.04
<b>《不可視存在》</b>		
II_ 未知存在信奉	-.06	.81
V_ 超能力信奉	.15	.56
VI_ 靈魂信仰	.10	.56
<b>〔因子相関〕</b>	***	.58

N=297

適合度検定:  $\chi^2_{(8)} = 17.09$ ,  $p = .029$ 

初期因子固有値 &gt; 1.04; 初期説明率 60.17%

学信奉」が両因子ともに負荷が低かったため (< .02), これを除き因子分析を行ったところ, 解釈可能で明確な因子パターンが現れた (表1-e)。

第 I 因子では, 「I. 占い信奉」, 「IV. 神道的信仰」, 「III. 性格占い信奉」, および 「VII. 北枕信仰」の負荷が高く, 自分の未来における行動の指針を示すと考え, 《行動示唆》と命名した。さらに, 第 II 因子への負荷が高い 「II. 未知存在信奉」, 「V. 超能力信奉」, および 「VI. 靈魂信仰」はいずれも不可視な存在を信じるかどうかを表しており, 《不可視存在》とした。

### 超常現象観, 宗教意識, および宗教行動との関係

#### 1. ピアソン相関分析

以上の分析で得られた下位尺度得点間の関係をピアソン相関によって, 検討した。

#### (1) 宗教意識と宗教行動との関係

ピアソン相関分析によって宗教意識と宗教行動との関係を見ると, 仮説1と一致して, すべての組み合わせで有意

表2-a 宗教意識と宗教行動との関係—ピアソン相関値—

[宗教意識]	[宗教行動]	
	I. 信仰中心的生活	II. 社会への貢献
I. 信仰による効能	.59 a	.38 a
II. 信仰上の体験	.62 a	.35 a

N=297  
a:  $p < .001$

な正のピアソン相関値があった(表2-a)。しかし、「社会への貢献」よりも「信仰中心的生活」のほうが宗教意識との関係が強かった。

## (2) 超常現象観と宗教意識および宗教行動との関係

超常現象観が宗教意識や宗教行動とどのような関係をもつかを探るために、超常現象観8下位尺度得点と宗教意識2下位尺度得点および宗教行動2下位尺度得点とのピアソン相関値を求めた(表2-b)。超常現象観と宗教意識の間には仮説2と一致してすべての組み合わせで正の有意なピアソン相関値が現れた。宗教行動の場合には、「信仰中心的生活」では同様に正の有意なピアソン相関値が認められたが、「社会への貢献」のほうでは全体的に値が小さく、有意に至らない組み合わせも見られた。

## 2. 共分散構造分析

「超常現象観⇒宗教意識⇒宗教行動」の構図に関する共分散構造を Amos26.0.0 を用いて行った。前述した単純相関分析に基づきモデルを作成し、潜在変数を設定し分析を

試みた(豊田, 1998)。修正指数を参照しながらパスの設定を変え、モデル適合度を改善し、最終モデルを得た。

## (1) 宗教意識と宗教行動との関係

潜在変数として[宗教意識]と[宗教行動]を設定し、前者では「信仰による効能」と「信仰上の体験」、後者では「信仰中心的生活」と「社会への貢献」を観測変数として用いた。[宗教意識]から[宗教行動]への直接的パスを仮定したところ、適合度も十分ですべてのパスが有意である解を得ることができた(図3-a)。したがって、仮説1は支持されたといえる。

## (2) 超常現象観、宗教意識、および宗教行動との関係

ここでは、超常現象観について先の高次因子分析(表1-e)に基づき[行動示唆]と[不可視存在]を設けた。前者では「占い信奉」、「神道の信仰」、「性格占い信奉」、および「北枕信仰」、後者では「未知存在信奉」、「超能力信奉」、および「靈魂信仰」を観測変数とし、「反科学信奉」はこの分析では除外した。[宗教意識]や[宗教行動]については(1)の分析と同様に観測変数を設けた。「超常現象観⇒宗教意識⇒宗教行動」の構図に基づき、潜在変数間のパスを仮定した。適合度が十分な解が認められたが(図3-b)、[行動示唆]と[不可視存在]ともに[宗教意識]に有意な正のパスを示し、仮説2は支持された。

なお、[行動示唆]から[宗教行動]への直接パスを仮定すると、有意な正のパスが見出されたが( $.20, p=.004$ )、適合度の改善はなかった( $GFI=.92, AGFI=.87$ )。同様に、[不可視存在から]から[宗教行動]への直接パスを設けても、有意なパスは得られなかった( $.06, ns$ )。

表2-b 超常現象観と宗教意識および宗教的行為との関係—ピアソン相関値—

[超常現象観]	[宗教意識]		[宗教行動]	
	I. 信仰による効能	II. 信仰上の体験	I. 信仰中心的生活	II. 社会への貢献
I. 占い信奉	.36 a	.41 a	.39 a	.14 c
II. 未知存在信奉	.26 a	.33 a	.21 a	.11
III. 性格占い信奉	.24 a	.33 a	.28 a	.10
IV. 神道の信仰	.31 a	.42 a	.40 a	.24 a
V. 超能力信奉	.35 a	.35 a	.36 a	.14 c
VI. 靈魂信仰	.27 a	.37 a	.30 a	.18 b
VII. 北枕信仰	.18 b	.26 a	.19 a	.18 b
VIII. 反科学信奉	.20 a	.17 b	.16 b	.09

N=297

a:  $p < .001$ ; b:  $p < .01$ ; c:  $p < .05$



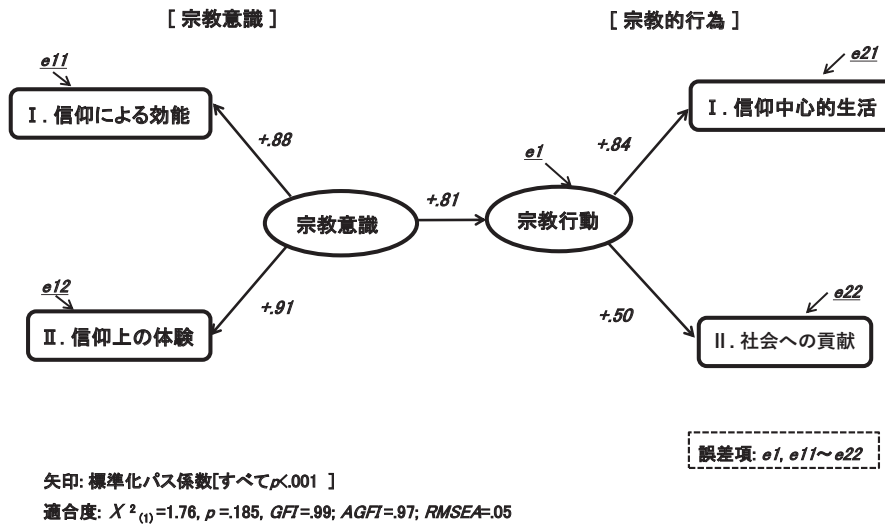


図3-a 宗教意識と宗教行動との関係—共分散構造分析 (Amos26.0.0, 最尤推定法) による因果分析 (N=297) —

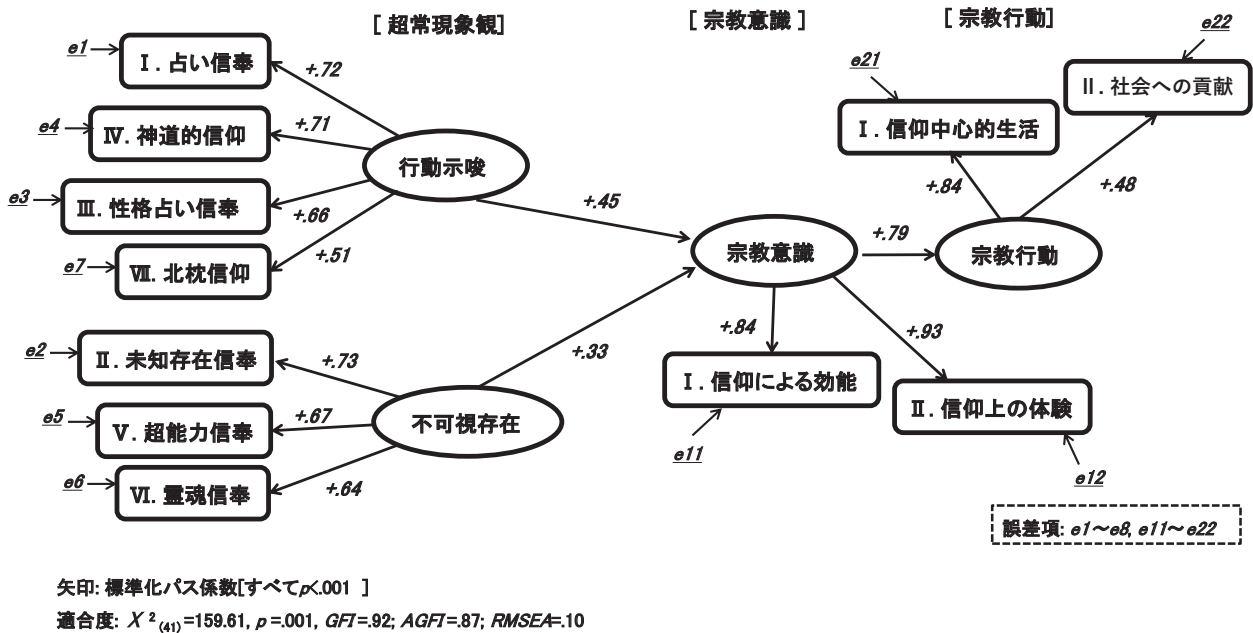


図3-b 超常現象観, 宗教意識, および宗教行動との関係—共分散構造分析 (Amos26.0.0, 最尤推定法) による因果分析 (N=297) —

#### IV. 考察

本研究の目的は、超常現象観に関する先行研究を踏まえ (諸井ら, 2014; 2016), 超常現象観が宗教意識や宗教行動とどのような関連を示すのかを検討することであった (図2)。そのために、宗教意識が宗教行動におよぼす影響に関する仮説1と超常現象観と宗教意識との重なりに関する仮説2の検討が中心とされた。

まず、本研究で新たに導入した宗教意識と宗教行動に関する因子分析の結果を考察しよう。宗教意識については「信

仰による効能」と「信仰上の体験」の2因子が抽出された。本研究の宗教意識尺度は、松島 (2005) がホーリネス系教会の信者を対象とした項目を一般的に宗教意識を表すように改変した。松島は5因子を抽出しているが、本研究の「信仰上の体験」が松島の「体験」に対応しているものの、本研究の「信仰による効能」では松島の他の4因子に該当する項目が混在していた。事前に行った平均値の検討の結果、8項目の平均値が低く、因子分析では除去された。本研究と松島による研究での因子構造の差異は、a) 回答者の差異、b) 項目表現の改変、いずれかのために生じたと推測でき

るが、今後検討する必要がある。なお、a) については、本研究の対象サンプルはキリスト教系大学の範疇に含まれるが、先述したように信者教育に積極的に取り組まれているわけではない。そのため、このような項目に対する反応は肯定的方向への偏りを示さないと推測される。対照的に、超常現象観尺度項目ではわずか3項目のみが除去されただけであり、超常現象観と宗教性（ここでは宗教意識および宗教行動）のずれを表しているといえよう。

因子分析によって2因子が抽出された宗教行動についても、宗教意識と同様の問題が認められる。本研究の項目は、安藤（1965）の項目を一般化した。項目水準のチェックでは、8項目の平均値が低く、分析対象から事前に排除した。本研究の2因子は安藤の「神中心的生活」と「宗教的修養」にそれぞれ対応していたが、「世俗生活への積極性と責任性」に対応する因子は現れなかった。安藤の回答者は、メソジスト系の私立女子高校という点を踏まえると、サンプルの差異の問題といえ今後検討すべきである。

ここで、本研究で設定した仮説1を検討しよう。ピアソン相関分析および共分散構造分析ともに仮説1と一致した結果が得られた。しかしながら、2つの分析ともに、宗教行動の「社会への貢献」よりも「信仰中心的生活」のほうが宗教意識との関係が顕著であった（相関値の大きさ、およびパスの大きさ）。これは、本研究の「信仰中心的生活」が信仰を前提とする項目から構成されているが、「社会への貢献」のほうは必ずしも前提としていない。つまり、一般的なボランティアや援助行動も含んでいる。したがって、「宗教意識⇒宗教行動」の図式については、とりわけ「社会への貢献」の側面について精緻な測定をするべきといえる。

次に、仮説2に関する結果を考察する。ピアソン相関分析では、超常現象観は、宗教意識2側面および宗教行動の「信仰中心的生活」と正の有意な相関値を示し、仮説2を支持した。しかし、超常現象観と「社会への貢献」との間の相関値は低く、有意に至っていないものもあった。また、共分散構造分析では、「超常現象観⇒宗教意識⇒宗教行動」の影響構図が確認された。ただし、超常現象観から宗教行動への直接的影響は認められなかった。なお、潜在変数として設定した「宗教行動」とその観測変数である「信仰中心的生活」と「社会への貢献」の関係は対照的であった。後者のパスの値は有意であったが前者よりもかなり小さかった。これは、先の述べた下位尺度の構成項目から解釈できる。

いずれにせよ、本研究の結果は、仮説2と一致している。

ところで、超常現象観8下位尺度得点を対象とした高次因子分析によって、自分の未来における行動の指針として機能する《行動示唆》と、不可視な存在を信じるかどうかに関する《不可視存在》の高次因子が得られた。共分散構造分析ではこれらの区別を組み込んだが（図3-b）、いずれの側面もほぼ同等に宗教意識の促進に寄与していた。

ところで、本研究の回答者は、先述したようにキリスト教主義に基づく女子大学の学生である。本研究で参考にした松島（2005）の研究では、特定宗教の信仰者（ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャン）を対象としている。宗教行動尺度については安藤（1965）の研究を参考にした。メソジスト系の私立女子高校生が対象とされている。また、金児（1997）は、浄土真宗門徒を対象とした宗教性に関わる調査を報告している。

ところで、わが国における宗教団体数や信者数を見ると（e-Stat, 2020）、神道系と仏教系が大半を占め、キリスト教系はきわめて少ない（表3）。これは文化庁への届けに基づいているが、思想・良心の自由を規定した憲法19条との関連で信者数については正確な数値ではない。しかし、質問紙形式で実施されている全国調査に関する小林（2019）の報告でも、キリスト教系信者の割合は1%程度であった。

さらに、わが国では、元々が特定宗教に由来する行事が日常化する現象やとりわけ結婚式や学校教育などで観察されるキリスト教のブランド化など（井上, 1999）、日本社会における宗教の特異性が指摘されている。

これらを考えると、宗教性を対象とした実証的研究では、次の2通りが可能であろう。a) 特定の宗教信者を対象に宗教性を支える心理学的機制を明らかにしていき、これらの特殊事例から普遍化を試みていく、b) 特定の宗教にこだわらず、一般的にそのような宗教的機制を探索する。先の松島（2005）や金児（1997）が採用しているのは明らかにa)の方策である。しかし、興味深いことに、松島（2016）は、次のような提案をしている。「『特定の宗教集団における信仰の有無』を基準にして考えることから一旦離れてみてはどうか」。この提案が、特定宗教への信仰を支える心理学的機制を集積することにより普遍性を獲得する方略なのか、宗教の分布状況を踏まえながら（小林, 2019; e-Stat, 2020）、特定の宗教への偏在を回避した全体的傾向を探索する志向性なのか曖昧である。対象の問題よりも、金児（2011）が指摘するように、宗教研究で意図されがちな護教論的観点を排した普遍性の追求が肝要であろう。

いずれにせよ、宗教性が、日常の一部でありながら、実証的俎上に載せられなかったことは事実であり、先のa)

表3 全国社寺教会等宗教団体・信者数—2018年12月31日現在—\*

	[宗教団体]						[信者数]**	
	神社	寺院	教会	布教所	その他	計		
神道系	80,983	14	5,026	847	627	87,497	87,219,808	48.10 %
仏教系	26	76,872	1,932	1,749	3,742	84,321	84,336,539	46.51 %
キリスト教系	—	3	7,102	724	756	8,585	1,921,484	1.06 %
諸教	65	41	17,040	16,877	1,144	35,167	7,851,545	4.33 %
総数	81,074	76,930	31,100	20,197	6,269	215,570	181,329,376	100.00 %

\*: e-Stat (2020) より

\*\*: 文化庁への届け出に基づくため、合計値が日本の人口を上回る。

と b) の研究方略を意識しながら研究の活性化が図られるべきであろう。さらに、本研究で試みたように、謂わば既存科学で説明し難い事象に関する意識としての超常現象観を宗教性に絡めて検討することも引き続き行う必要がある。

#### 〈付記〉

(1) 本報告は、第2著者の大島有梨沙が第1著者の下で卒業研究(人間生活学科2019年度卒業論文)のために立案・実施した研究に基づいている。

(2) データの統計的解析にあたって、*IBM SPSS Statistics version 26.0.0.1 for Windows* と *IBM SPSS Amos version 26.0.0 for Windows* を利用した。

## V. 引用文献

Allport, G.W. 1950 *The individual and his religion*.

New York: The Macmillan & Co. 原谷達夫(訳)『個人と宗教』1953 岩波現代叢書

安藤延男 1962 宗教的情操の因子分析的研究 教育・社会心理学研究, **3(2)**, 54-63.

安藤延男 1965 宗教的行為インベントリーの標準化—とくに基督教との関連における— 教育・社会心理学研究, **1**, 61-73.

Fletcher, G.J.O., Danilovics, P., Fernandez, G., Peterson, D., & Reeder, G. D. 1986 Attributional Complexity: An individual differences measure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 875-884.

原岡一馬 1970 『態度変容の社会心理学』金子書房

廣岡秀一・元吉忠寛・小川一美・斎藤和志 2001 クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究(2) 三重大学教育実践総合センター紀要, **21**, 93-

102.

廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛 2000 クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 三重大学教育学部研究紀要, **51**, 161-173.

井上順孝 1999 『若者と現代宗教—失われた座標軸—』ちくま新書

岩永 誠・坂田桐子 1998 超常現象に対する肯定的信念の形成に関する研究(1)—個人要因の影響— 広島大学総合科学部紀要IV理系編, **24**, 75-85.

金児暁嗣 1997 『日本人の宗教性—オカゲとタタリの社会心理学—』新曜社

金児暁嗣(監修) 2011 『宗教心理学概論』ナカニシヤ出版

金児暁嗣 2011 イントロダクションと研究方法論 金児暁嗣(監修)『宗教心理学概論』ナカニシヤ出版, 3-26頁

岸本英夫 1961 『宗教学』大明堂

小林利行 2019 日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか—ISSP 国際比較調査「宗教」・日本の結果から— 放送研究と調査, **69(4)**, 52-72.

楠見 孝 2011 批判的思考とは—市民リテラシーとジェネリックスキルの獲得— 楠見 孝・子安増生・道田泰司(編著)『批判的思考力を育む—学士力と社会的基礎力の基盤形成—』有斐閣, 2-24頁

松島公望 2005 日本人クリスチャンにおける宗教意識尺度の開発—プロテスタント教会—教派(ホーリネス系教会)を対象にして— 学校教育学研究論集(東京学芸大学), **11**, 13-28.

松島公望 2016 日本人の宗教性を測る—宗教を心理学するためのガイドライン— 松島公望・川島大輔・西脇良(編)『宗教を心理学する—データから見えてくる日本人の宗教性—』誠信書房, 1-19頁

松島公望・川島大輔・西脇良(編) 2016 『宗教を心理学

- する—データから見えてくる日本人の宗教性—』誠信書房
- 諸井克英 2000 人は出来事の原因をどのように帰属するか? —帰属複雑性尺度の検討—, 人文論集 (静岡大学人文学部), **51(1)**, 1-25.
- 諸井克英・早川沙耶・板垣美穂 2014 女子大学生における超常現象観の基本的構造 生活科学 (同志社女子大学), **48**, 13-24.
- 諸井克英・徳光祐衣・板垣美穂 2016 女子大学生における超常現象観の基本的構造(2)—超常現象観におよぼす日常的思考スタイルの影響— 学術研究年報 (同志社女子大学), **67**, 69-78.
- 西山 茂 1991 第四次新宗教ブームの背景 小田晋編『宗教・オカルト時代の心理学 (現代のエスプリ1991/11)』至文堂, 34-43頁
- NHK 放送文化研究所 2010『現代日本人の意識構造 [第七版]』日本放送出版協会
- 須永範明 1996 非現実感質問紙の作成 心理学研究, **67**, 86-93.
- 豊田秀樹 1998『共分散構造分析入門 [入門編] —構造方程式モデリング—』朝倉書店
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67(1)**, 61-67.
- [インターネット・サイト]
- e-Stat 2020 宗教統計調査—全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数— {<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00401101&tstat=000001018471&cycle=0&tclassI=000001135483>}

#### 付表1-a 宗教意識尺度における残余項目

rel_con_a_1	私は、宗教的な信仰をもたなければ幸福にはなることができないと思う。
rel_con_a_3	私は、他の人との宗教的なつながりに楽しさを感じる。
rel_con_a_4	宗教的信仰は、私の人生の全てに影響している。
rel_con_a_5	私たちは、神や仏などを信じるための組織や集団に献金すべきである。
rel_con_a_8	私は、同一の神や仏などを信じている人たちとの交わりを通して、神や仏などの心を知ることがある。
rel_con_b_1	私は、宗教的信仰を通して自分自身を見つめることができる。
rel_con_b_9	私は、宗教的な信仰の場 (教会、神社、寺など) に参加することによって、仲間と親しい交わりをしている。
rel_con_c_7	私は、神や仏などと交わったような経験をしたことがある。
rel_con_c_9	私が今の状態 (何かの職業に就いていたり、学校に通っていたりすること) にあるのは、神や仏などの考えによっている。

#### 付表1-b 宗教行動尺度にける残余項目

rel_beh_a_1	私は、何かの宗教的行事に定期的に参加している。
rel_beh_a_2	私は、宗教的な書物から学んだことを実際の生活に生かそうとする。
rel_beh_a_4	私は、自分ひとりで、宗教的な書物を読むことがある。
rel_beh_a_5	私は、宗教的な書物を幅広く読む。
rel_beh_a_7	私は、食事の時に、神様や仏様に感謝する。
rel_beh_a_8	私は、宗教的な信仰について話し合ったりする。
rel_beh_b_1	私は、どこかで災害が起こった時、救援物資や寄付金などに協力する。
rel_beh_b_2	私は、宗教的な感謝の気持ちを表すために、献金をする。
rel_beh_b_3	私は、家族と宗教的な事柄について話し合う。
rel_beh_b_4	私は、他の人々に対する、何らかの奉仕に参加する。
rel_beh_b_7	私は、現代の社会問題や政治問題について自分自身にも責任があると思う。
rel_beh_b_8	私は、宗教的な行事や奉仕に喜んで参加する。